

全国農業新聞

週刊 月4回金曜日発行
購読料:月700円(送料、税込み)

総菜の材料は地元で調達 発生した生ごみを処理 肥料を農業者に供給

「資源循環型」に尽力

陸前高田市
橋勝商店

買い物客に容器の持参を呼びかける総菜店を運営する陸前高田市の橋勝商店は、地元農業者からの原材料購入と、農業者への肥料の供給という「資源循環型」の取組を拡大しようと取り組んでいる。

同社は、昨年12月に市中心部へ店舗を再建したことを機に、主に市場から調達していた農産物でできるだけ市内産に切り替えたいと考え、若手農業者に声をかけた。

これに応えた一人、佐々木輝昭さん(37)は、昨年からタマネギなどを納入している。年間数量は、前年に同社から示された、計画的な作付けが可能だ。「市場などで『規格外』でも全量買い取りしてくれる」と話す。ハ

ウスに灌水・液肥の自動供給システムを導入し、省力化。品質と収量のアップ、品目の拡大をめざしている。

今後、総菜を作る過程で発生する生ごみなどを、同社が肥料にして農業者に供給することとしており、その効果に期待を寄せている。

同社の橋詰真司代表取締役

佐藤彰情報員



店内で橋詰さん(左)と佐々木さん

上:2022年9月16日付け全国農業新聞(岩手版)より
下:令和5年1月1日付けいわて県農業会議通信より

全国農業新聞は、農業者の公的代表機関である農業委員会のネットワークが発行する週刊の農業総合専門紙。
月1回の岩手版では、本市をはじめ県内の農業委員会事務局職員が、担

い手や身近な出来事を農業者の視点で取材し、記事を執筆しています。
購読の申し込みは、お近くの農業委員・農地利用最適化推進委員又は農業委員会事務局(市役所4階)までどうぞ。

締役は「地元の農産物を使って食の大切さを伝え、生産者と地元商店とお客さまがともに喜びあえる仕組みを作りたい」と話す。

佐々木さんと同じ地域で農業を営む石川秀一農業委員会会長職務代理者は「いい取り組みなので、できる限り協力したい」と話している。

(陸前高田市農委会・佐藤彰情報員)

農業委員の活動紹介

陸前高田市農業委員会 農業委員 熊谷 眞美子

陸前高田市農業委員会は、令和4年9月19日「広田地区農地相談会」を開催しました。

私が吉田司推進委員と担当する広田町は、市の南東部の広田半島にあります。平坦部が少なく、比較的まとまっている田(およそ30ヘクタール)は、平成22年に県が、ほ場整備事業に着手し、翌年3月の東日本大震災津波を経て、平成29年度に完成。現在、農事組合法人広田半島が耕作しています。傾斜地は、主に畑として利用されていますが、自作地は作付けされない農地が徐々に増えています。

7月、吉田氏から「地元の農地の情報を得るため、相談会を開いてはどうか」と提案がありました。2人とも委員に選任されて一年余り。キャリアのない私たちが相談に応じられるのか不安がありましたが、地域に農業委員会の役割を周知できるチャンスとして、8月の総会で承認を受け、開催が決まりました。案内チラシは、吉田氏が作成し、市の行政文書として町内全世帯に回覧。法人の役員を訪問し、趣旨を説明しました。

当委員会初の相談会当日は、私たちと事務局職員で相談に対応。台風一過ということもあり会場での相談は2件でしたが、事前に問い合わせがあったり、法人の役員からは「よい取り組みだ」と声を掛けられました。また、地元新聞の取材を受けたこともあり、開催後も電話や訪問による相談が寄せられています。

今回の取り組みにより、農地に関する悩み事を、直接聞き取りできたことは良かったと思います。農家の悩みを聞き、寄り添いながら、気兼ねなく相談してもらえるような農業委員になりたいと思います。



相談に応じる熊谷眞美子委員